

上海・東亜同文書院

# メデイア人脈を考察する

——戦中・戦後の三つの「事件」から

飯田 いいた 和郎 かずお  
(一般社団法人アジア調査会理事)

## 第1章 言論統制下 掲載された軍部批判記事

### 第3節 ひとりのジャーナリストが見つめた日中戦争

竹槍事件は戦後、映画『激動の昭和史 軍閥』(監督・堀川弘通、東宝制作、1970年8月公開)の重要なシーンで取り上げられたほか、何度もメデイアの素材になってきた。その多くは報道機関が当時、軍部などに対して行った戦争協力の検証についてである。『読売新聞』は2006年3月、「検証・戦争責任 『言論』 忘れ宣伝機関

に 戦況伝えず国民鼓舞」との見出しをつけた特集<sup>82</sup>を掲載した。戦時下において政府・軍部による言論統制、それに呼応した報道機関の姿を描いた。その中で、竹槍事件を取り上げている。『読売新聞』は「そもそも、この「竹槍事件」は、「海軍記者の陸軍批判」との意味合いが強く、戦争そのものをストレートに批判したものではなかった<sup>83</sup>」と解説した。

確かに執筆者の新名丈夫は海軍省の記者クラブ、黒潮会のメンバーだった。また、竹槍事件の記事は陸軍との対立

第3回

を深める海軍の主張、すなわち陸軍の言う本土決戦ではなく、海洋戦に重きを置き海洋航空機増産・配備を訴えている。だが、この『読売新聞』の解説は記事掲載を決断した吉岡文六の経歴や、彼の心中をはじめとした背景に迫っておらず、分析の浅さを指摘せざるを得ない。なぜなら、吉岡がこの記事に託した思いは、陸軍と海軍の戦略や戦術の相違、また陸海軍間の確執を超越したものであったからだ。

吉岡文六と同じ熊本・人吉出身の郷土史家、渋谷敦によると、「支那事変と呼ばれた日・中間の戦いは、事実上は中国を舞台にした日本と米・英の戦いであった。イギリスとアメリカが対蒋援助をつづけていなかったら、日・中戦というものの性格はまったく異なったものになっていただろう。中国の徹底抗戦のささえはイギリスでありアメリカであっただけに、支那事変は日本にとって泥沼の様相を呈する結果を生んだ。そして益々深みにはまり、好むと好まないにかかわらず米英と戦わなければならない宿命を担ったのである」。<sup>84</sup>

支那事変とも呼ばれる盧溝橋事件<sup>85</sup>を機に日中全面戦争、そして、圧倒的に国力で日本に勝る米国や英国を相手にした太平洋戦争に突入せざるを得なくなる。蒋介石<sup>86</sup>は米英兩國を日中戦争に引き込もうと策を巡らし、それが結実した。その結果、中国を相手にしていた日本にとって、戦場は中国大陸にのみならず、太平洋、東南・南西アジアへと広が

り、破滅への道をたどることになる。

竹槍事件の記事執筆者、新名丈夫は、『昭和史探訪4 太平洋戦争後期』の中で、三國一朗<sup>87</sup>のインタビューに答えている。

——日本が中国に侵略すればアメリカとの戦争になるし……。

新名 そうなんです。太平洋戦争というのは、結局は、日本とアメリカの中国市場の争奪戦ですね。アメリカが中国市場を目指しているのは、建国以来です。それでペルリなんか、日本に来るようになったわけで、太平洋を西へ西へと進んできているんです。<sup>88</sup>

日本が侵出を図った中国大陸に対して、米国も同様に野望を抱いた。各国の思惑が交錯したのち、日本は米国との戦争に至る。一方で、国家総動員法の厳格化が示すように、国内の物資不足は顕著化していた。航空機の生産力も落ち込んでおり、何より海外に依存してきた燃料が不足し始めていた。つまり、竹槍事件の紙面で、海軍の主張する海洋航空機の増産、もしくは限られた原資を航空機製造に集中することを主張したが、現実にはすでに困難な段階となっていた。

勝ち目のない戦いは一刻も早く終えるべきである。吉岡文六はそう考え続けていたのだろう。ただし、厳しい言論統制下にあった当時、戦争継続に反対する論陣を張ることは、最悪の事態として、新聞社という組織全体の終焉もあり得る。吉岡は一見、海軍の主張に沿うような論調を演出しながら、それも不可能だと分析していたはずだ。中国の背後にある米英両国との戦い、さらに言えば日中戦争が二国間にとどまらず、多国籍化<sup>90</sup>されてしまったことで、日本が迎える命運を彼は予知していたのだ。

渋谷敦は「すでにだれよりも早く決意を固めていた吉岡」<sup>89</sup>のその心中を推理する。決意とは、統制下であれ、軍部に挑戦する決意に相違ない。そして、竹槍事件としてそれが現れた吉岡の決意の背景として「かれが情熱を注いだ中国は無残にも戦争の泥沼と化し、日本はそこから這い出ることも手を引くことも出来ない破目に陥っている」<sup>90</sup>当時の状況を挙げた。時に「軍の代弁に近いような」(城戸又一)記事を送り、ライバル社との比較で「そりゃ、だんぜん」(松本重治)と、能力を高く評価されてきた吉岡文六の心情を、渋谷は以下のように察する。

新名の気持ちより、はるかに吉岡の感情を絶対的にしているものがあるのだ。かれは長く軍と接触し、その間、日・中関係を自分のことのようによろこび、悲しみ、怒

り、そして、ついに軍部の大陸進攻の正体をつかみ、いまはもう、ただ陸軍の幻滅あるのみだった。それだけに吉岡の怒りは大きかったといえるだろう。<sup>91</sup>

吉岡文六は、中国をどのように見ていたのだろうか。生涯の主題だった中国に対する視線は、優秀なジャーナリストにふさわしい鋭い洞察力を伴う。そして、それは竹槍事件の伏線になっていく。『支那人』<sup>92</sup>とタイトルを付けた単行本がある。1939(昭和14)年に出版された同書に、吉岡は「政治外交の性格」と題した解説文を寄せている。中国人の民族性からこう見抜く。



【図8】書籍『支那人』の表紙

自己の生活に必要であれば恩讐も面子もないのである。支那人は面子を重んじるといふ。勿論形式的には非常に重んずる、重んずるやうには見える。だがこれは頗る限定的なものであつて、自己保存の道具としての表現にしか過ぎないのである。名誉のためには死するといふものではなくて、死せざるがために面子を重んずるといふことなのである。多くの場合強者に対する防禦の手段として用ひられてゐるのである。要するに支那の民族性は、弱肉強食の野に放置された人間の集団が、強きものは如何にして強者の地位を保ち、弱きものは如何にして強きものに喰われぬかといふ自己保存の欲望が習慣化されたものに外ならない。一切はそこから出てゐるのである。<sup>93</sup>

書籍『支那人』は「我々は色々な角度から支那人を検討し、それを通じて支那の社会を知り、支那の政治、経済、軍事の一端にふれ、支那及び支那人の特性を見たい」という狙いのもとに刊行された。日本と中国は、1937年7月の盧溝橋事件を機に、大陸各地で戦闘を続けていた。日本国民向けに「敵を知る」ことを優先した編集がうかがえる。吉岡を含め12人がジャンルごとに筆を執っているが、「執筆者は何れも真摯な支那研究家で、然も現地の土と人に、深いつながりを持つた人々であり、支那人の体臭を思

ひながら、然も深く掘り下げた『支那人』が浮き彫りにされたわけだ」と「序」は自賛している。

中国人はメンツを重んじるとされる。吉岡がこの文章に表わす中国人への評価はかなり手厳しい。時世と出版物の性格が吉岡の筆をそのようなトーンへと進めさせたとも推察できる。ただ、吉岡が「支那人の体臭を思ひながら」同書を通じて日本人に伝えたかったのは、メンツを重んじながらも、時にはそれを覆い隠し、強者に対しては「自己保存」を優先する、中国人ならではのしたたかさではなかっただろうか。これは日本人にはない、中国人独特の民族性であることに、警鐘を發したかつたはずだ。

そのしたたかで、一筋縄ではいかない中国人相手に、日本は戦争を遂行しているのだ。吉岡文六はその4年前の1935年3月、似た趣旨の論文を残している。「対支外交の先決問題」と題した論文における、中国への評価はやはり辛らつた。「率直にいつて支那は、文明の程度も低いし、産業機能も弱い。日本は支那に比較すると高度の文明もち、高度の産業機能をもつてゐる。」「薄弱なる治安維持、不完全な交通、その上、政府の首脳者はい、加減な手合ひばかりである」と書き並べ、中国という国家、また指導者たちを酷評している。しかし、『支那人』での記述同様、見下すだけではなく、日本人の認識では測りきれない、中国や中国人に対する不気味さへの警戒感が伝わってくる。

そのしたたかで、不気味な中国と日本が衝突することを、吉岡文六はかなり早い時期から予測していたことがわかる。日中戦争開戦のちょうど2年前、1935年7月発行の雑誌『東洋』での発言から、拾い出したい。

だんだん考へて参ると、日本と支那とは宿命的に相抗争するやうな位置に置かれて居るのではなからうかと思ふことがあります。と申すのは、第一に日本の産業状態と支那の産業状態とを比較してみる時に、浙江の新資本財閥の産業が、日本の産業の或る部面と競争状態に在る。この競争状態が要するに今日の排日の原動力になつて居る、たとへば紡績業などは、支那にも起つて居る、支那の紡績と日本の紡績とは競争の状態にあるのであります。この競争状態がどうしてなくなるかといへば、兩國の外交関係で余程の調整をしなければ、自然の儘に放置しておいたのでは到底この調整は出来ない、喰ふか、喰はれるかの争闘関係まで行くものです。従つてこういう経済関係から来る排日は非常に根強いものであつて、この排日を日本が思ふやうに根本から抜き去つてしまふことは到底出来ないだらうと思ふ。<sup>98</sup>

これは社団法人東洋協会が識者や協会幹部ら15人<sup>99</sup>を集めて開いた「支那座談会」における吉岡文六の発言である。

中国を分析するうえで、政治や軍事だけではなく、経済とナシヨナリズムを結びつけた視点が新鮮だ。当時、日本の基幹産業の柱の一つだった紡績産業を例に挙げた吉岡は、それが中国と競合し双方のナシヨナリズムに火をつけ、国益のぶつかり合いにつながると指摘したのだ。

吉岡のその予言的中する。欧州列強は第一次世界大戦によって輸出競争力を喪失、それを契機に中国では紡績を筆頭にした軽工業が急成長した。支えたのが、外資の支配を受けない中国国内の民族資本である。紡績は民族産業の花形となる。しかも、蒋介石の妻・宋美齡<sup>100</sup>の出身で、彼の後ろ盾がその浙江財閥の一つだった。長く虐げられてきた弱者が一定の経済的実力を伴うにつれ、そしてナシヨナリズムと結びつけば、侮れない敵になる、だから、正面から衝突することになれば、日本は大きな傷を負うのではないか。吉岡はそう見立てたと論者は考える。

極めて悲観的な見通しは、その2年後、盧溝橋事件によって現実になる。盧溝橋事件などを振り返りながら、吉岡は同じ『東洋』1940年9月号へ寄稿した。文章のタイトルは「必然の日支抗争」である。

日支の関係が今日の情態に陥つたといふことは、実に悲しむべき必然の運命だったのである。盧溝橋の事作「ママ：引用者注」や、大山大尉虐殺事件は、単なる導火線

に過ぎない、(略) 最近十年間の日本、支那は何れも、衝突するやうに歩いて居るのである。衝突は何れにしても必然の勢だとしなくてはならない。<sup>102</sup>

盧溝橋事件から1カ月後の8月9日、上海海軍特別陸戦隊中隊長、大山勇夫中尉が上海郊外で、中国の保安隊員に射殺された。この事件は、第二次上海事変のきっかけの一つになり、日中の対立を激化させた。吉岡文六はさらに當時の日本の置かれた状況を分析している。

日本の政治家や、新聞人や、雑誌人は、思ひつきや、理想や主張を勝手に説くことが出来るのである。であるが国家全体の動き方は、これ等を尻眼にかけて逆な方向に向かふ場合がある。明治初年の国家の組織がプリミティブな時代なら一英雄政治家の意図が国家の方向を決定するエレメントをなした。然し近代のやうに国家の組織、諸機構が成熟した国家にありては、国家内部の客観情勢の上に醗酵する或るものによつて国家の方向は決定されるのであつて、一政治家、一理論家の左右できるものではない。内部の情勢が一足先に行くのである。(略) 要するに今回の日支事件は喰ふか喰はれるかの清算戦でなくてはならない、然らざれば同様の戦争を数年後に残すのみである、その時の双方の犠牲は更に大きい。<sup>103</sup>

「成熟した国家の方向は、一人の政治家、一人の理論家の左右できるものではない」と述べ、列強に肩を並べるまてになつた日本だけに、弱者・中国と日本を結ぶ「単なる導火線」であれ、小さな火が線を伝い、やがて大きな爆発に至る。だから「必然の日支抗争」だった、と。

前述の座談会で述べた日中が衝突するとの予言から5年余、その予言が現実になつた日中開戦からすでに3年余が経過している。そういう中で、吉岡が日中開戦をはさんで、この二つの文章で同じ表現を用いていることも興味深い。「喰ふか喰はれるかの争闘関係」は、「日支事件は喰ふか喰はれるかの清算戦」となつた。蒋介石の抵抗に遭い、一向に終戦の道筋は見えてこない。早期に決着を付けないと、「同様の戦争を数年後に残すのみ」。それは日中戦争から、米國も巻き込んだ太平洋戦争への発展を予期していたやうに覚える。そして「その時の双方の犠牲は更に大きい」。著しい国力の差がある米國相手に無謀な戦争を挑み、大きな犠牲を生む。この吉岡の考え方は、竹槍事件における決断の予兆とも言えないだろうか。

吉岡文六は國民政府の指導者、蒋介石をウオッチし続けていた。吉岡は36年12月18日、東京・丸の内で開催された木曜倶楽部で、「支那はどうなるか」とのテーマで講演している。そのわずか6日前の同12日に、蒋介石が拉致・軟禁される西安事件<sup>104</sup>が発生。蒋介石の安否がわからないまま、

そのニュースは世界を駆け巡った。「西安事変の唯中の時期に於て」<sup>106</sup> 開かれた講演会になった。

講演冒頭、吉岡は「私もこの事件『西安事件』…引用者注」が起りまして、新聞記者としましては書入れ時であります。それで大変忙しい目に遭ひまして、不眠不休でやつて居ります」と近況を語るとともに、自己紹介をしている。「私は十年前に南京に参りまして、それから七年半許り向ふに居りました。日本に帰りまして二年半になりますので丁度十年になりますが、蒋介石政権を専門に研究して居ります」と述べている。

その蒋介石は西安事件後、生還したものの、中国大陆ですくみ合ってきた共産党との間で、対日統一戦線の構築を承諾した。蒋介石が指導する南京・国民政府を観察し続けてきた吉岡文六は、蒋介石の手腕を熟知していた。

吉岡は講演で、19世紀のドイツ統一の要因として、軍事力、財力、ナシヨナリズムの3点を挙げたうえ、蒋介石が独裁体制を築いてきた理由について「浙江財閥といふ新興資本団が発生してゐます。その浙江財閥と蒋介石の軍事力と結びつけたことが今日蒋介石が統業を完成させた理由になるのであります。これが蒋介石の、僅か十年間に天下統業をした一番大事なる原因になる。さうしてドイツがやつた様に、支那に今迄なかつたものを造り出した。これがナシヨナリズムであります。抗日、排日と云ふ、日本に対する敵

愾心を煽り乍ら国家と云ふものを立てたのであります」と分析してみせた。ドイツ統一と同じように、軍事力と財力、それに中国民衆に向けた対日ナシヨナリズムを巧みに操る蒋介石の指導力を警戒している。

吉岡は1930～40年代、中国に関する数多くの論評を残しているが、その中では蒋介石の独裁への批判が目立つ。たとえば、前出の『支那人』の中では「強者の力を無遠慮、無制限に揮はれるといふことは支那人にとつて非常な恐怖である。この恐怖の深刻さは、歴史の経験の少い日本人の想像も許さない程度である。支那人は政治生活において、また社会生活において、余りに多く、この経験をもちつてゐるのである」と指摘。蒋介石が次々と周囲を肅清する様子、自身の見聞をまじえながら記している。そして「世評を一顧に与へず、必要なれば無遠慮、無制限に強者の力を揮ふといふこの蒋介石の断固たる態度」<sup>107</sup>を糾弾している。

中国の長い歴史が証明するように、王朝が崩壊し、別の王朝が出現するたびに、新たな皇帝を頂点にしたピラミッド型社会が繰り返して出現してきた。そこには頂点に立つ者一人が「強者」となり、それ以外の弱者はしたたかに生き残りをかける。その構図は、蒋介石独裁体制でも変わらないうが、蒋介石はアヘン戦争以降、半植民地状態を強いられ中国に、ナシヨナリズムを巧みに持ち込んだ。

中国への現状に対する吉岡の憤りは、やがて日本国内に

向かう。38年に『国際知識』に執筆した「外務省外交の復活を望む」と題した吉岡の論文は、そのタイトルから類推できるように、日本の対中戦略全般において、陸・海軍双方への失望を表すとともに、外務省の奮闘を促したものである。

この中で、吉岡は「戦時状態における日本の大きな欠点は、政治、社会、その他のあらゆる部面において繩張りがあつて、繩張り意識が非常に強いといふことであつた」と断じている。繩張りの対象は中国である。さらに以下の記述は、日本にのちに起こることを見事に予言している。

陸軍は主として大陸国防の見地から支那を見、海軍は海洋の国防の見地から支那を対照とする。外務省は大した魂膽をもたない。その日その日を右往左往してゐる形であつた。それぞれの眼には支那が異なつた形に見へ政策は必ずしも一致しない。それぞれが権限をもち手段をもち、行動を取るのである。一致しやう筈はないのである。従つてお互が積む賽の河原の石積をお互が壊し合つてゐるといふものも縷々あつたのである。そのうちでも行動の最もダイナミックなものが一番はばを利かすといふことになつて外務省の外交はいつしか影がなくなつてしまつた。<sup>113</sup>

繩張り意識、それぞれの眼に見える異なる支那の形、一致しない政策に加え、幅を利かす「行動の最もダイナミックなもの」とは、陸軍を指すのだろう。吉岡文六が列挙した「日本の大きな欠点」は次第に肥大化し、対中戦争のみならず、太平洋戦争に突入していく。1938年8月発行の『国際知識』誌上で論じた吉岡の現状認識はその6年後、竹槍事件に至る東條英機の暴走、さらにはその背景の一つでもあつた陸軍と海軍の確執、外務省の無力化という形で、より現実となるのだった。

太平洋戦争の主たる敵は米国だ。だが、そもその発端は、日中両国間の武力衝突といえよう。日本が陥つた深淵への第一歩が日中戦争なのだ。日本と中国の戦いの延長線上に、米英との戦争がある。戦力で圧倒的に日本に勝る米国にはかなわない。それが各地の戦場で現実となっている。勝ち目のない戦いは一刻も早く終えるべきである。吉岡はそう考え続けていた。

「中国で学び、中国で活動してきたジャーナリスト」吉岡文六だからこそ、その中国との向き合い方が、日本の行く末を決めると考えていた。吉岡は中国の背後にある米英両国との戦い、さらに言えば日中戦争が「国際化」されてしまったことで、日本が辿る命運を予知していたのだ。次節では、吉岡の胸中をさらに読み解いていく。

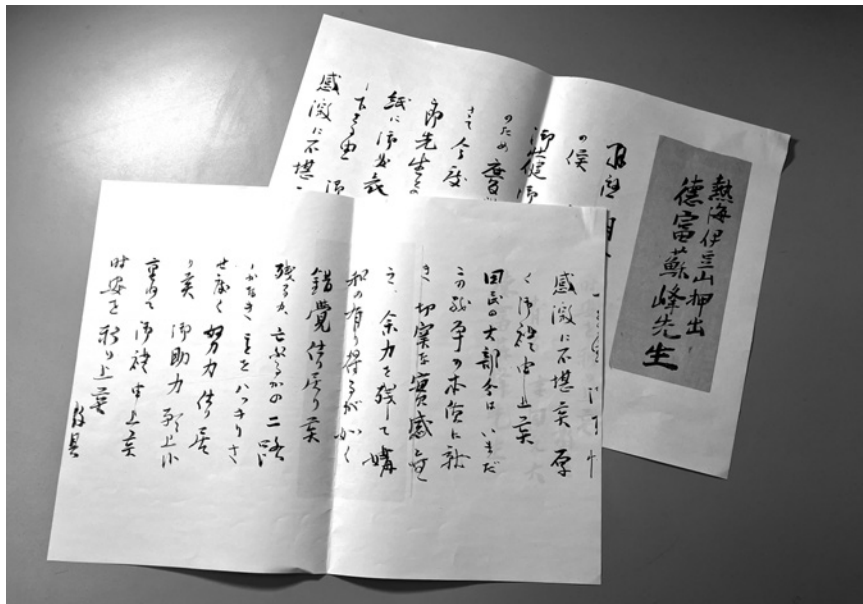


第4節 遺された言葉が語るもの

JR東海道線二宮駅（神奈川県中郡二宮町）から住宅街を抜け、10数分歩くと、3階建ての白い建造物が現れる。徳富蘇峰記念館は明治、大正、昭和にわたり著名な評論家、歴史家として知られた徳富蘇峰<sup>114</sup>が遺した膨大な資料を管理・保管する。蘇峰の晩年に秘書を務めた塩崎彦市が、蘇峰の十三回忌にあたる1969年、私邸内に建てた。コレクションには各界の人物が蘇峰に寄せた書簡が多数保存されている。その中には吉岡文六の筆による3通もある。吉岡の苦悩が確認できる1通の一部を紹介したい。

国民の大部分はいまだこの 戦争の本質に就き切実な  
 実感無き、余力を残して講和の有り得るが如く錯覚仕り  
 居り候 残るか亡ぶるか<sup>115</sup>の二路しかなきことをハツキリ  
 させ度く努力仕り居り候 ご助力願上げ重ねて御礼申し  
 上候<sup>116</sup>

書簡は巻紙状の和紙に、和筆による墨で綴られている。『毎日新聞』が徳富蘇峰と本多熊太郎<sup>116</sup>の2人を招いて開いた時局対談への礼状である。書簡の末尾には「十月七日吉岡文六」とあるが、昭和また西暦の記述がない。徳富蘇峰記念館の学芸員は「これだけでは何年に書かれた書簡かは特定できない」と説明する<sup>117</sup>。しかし、文面にある時局対



【図9】吉岡文六が徳富蘇峰に宛てた書簡（複写）＝論者撮影

談は1943年10月19日付から同22日付までの4日間連続、『毎日新聞』朝刊1面に、「決戦と一億の覚悟 徳富・本多両翁対談」との見出しで掲載されている。<sup>118</sup>

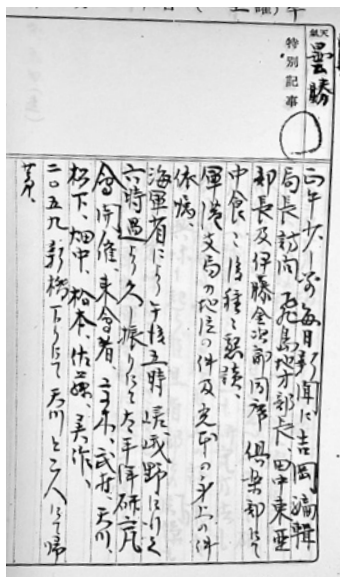
このことから、蘇峰へ宛てた礼状にある「十月七日」とは1943年に相違ない。1943年といえば、この第1章第1節の竹槍事件の記事にあつたように、ガダルカナル島からの日本軍敗退（2月）、アッツ島での日本守備隊全滅（5月）など戦局の悪化が伝わってきた。蘇峰・本多対談連載3回目の21日には東京・明治神宮外苑競技場において、初の出陣学徒壮行式が開催された。兵員不足を補うため、それまで26歳までの大学生に認められていた徴兵猶予を文科系学生については停止し、20歳以上の学生を入隊・出征させる学徒出陣が始まった。翌11月には米・英・中3カ国首脳がエジプトのカイロに集まり、早くも日本の降伏後の戦後処理の在り方を協議（カイロ会議）した。すでに日本の敗色は濃いものになっていた。

軍部は厳しい情報統制を敷いていたものの、国民は日本の劣勢を感じ始めていた。そして吉岡文六が徳富蘇峰に宛てた書簡は、国民にまん延する厭世的な世相への吉岡の心情を表している。書簡にある「講和の有り得るが如く錯覚」、つまり全面降伏ではなく、米国との講和も可能ではないか、という声に対し、吉岡はそのような期待感すら樂觀的すぎないように見ていたことがわかる。

吉岡文六は同じ書簡の中で、日本の行く末について「残るか亡ぶるか」の二路しかなきこと」としている。ここで使っているのは「勝つか負けるか」という表現ではない。報道機関の編集幹部だからこそ、知り得る真実、すなわち米国を前に、圧倒的に不利な戦況において「勝つ」ことは、もはやなく、最善の選択は「残る」ことしかあり得ないと吉岡は考えた、と理解するのが自然だろう。

繰り返すが、「残る」とは「勝ち残る」ことではない。「国が残る」ことだろう。どうすれば残れるか。戦争を止める、降伏すること。だが、ここまで述べてきたように、軍部の管理・統制のもと、社を存続させなくてはならない。それを遂行する立場から、この1943年10月時点では明確な意思表示ができなかったのではないだろうか。論者は、文面から吉岡の葛藤、焦燥を感じる。

ただし、「決戦と一億の覚悟」の見出しのとおり、対談記事のトーンは戦争継続に終始し、国民に戦意高揚を訴える。連載第1回は「戦局は正に決戦の段階に入ったことを示してゐる」<sup>119</sup>の書き出しで始まり、徳富蘇峰が「今日はつまりたとへば日本が東亜の盟主として米英を放逐するか、米英が東亜の盟主となつて日本を放逐するかであるから彼われを殺すか、われ彼を殺すかよりほかに途はない、両立といふ妥協の余地はないのである」と語れば、本多熊太郎も「これも大東亜戦完遂後には日本の指導で新しい国家に



【図10】高木惣吉の日記  
(1943年11月20日付) 複写

更生したならば、(略)支那も徳富先生のおつしやる儒教精神に還り、事象の上に具現することになると思ふ、かうした意味からも、如何に苦しくとも齒を食ひしばつて、大東亜戦に輝かしい勝利を打ち樹てねばならぬ、やりとげるまで頑張らねばならぬと思ふのです」などと応じている。

太平洋戦争宣言の詔勅の起草者、徳富蘇峰は、大日本言論報国会の会長職にあり、「満州事变当時から軍部に協力し、超国家主義、皇室中心主義を主張して、戦中の言論界の最高の指導者」だった。真実を知りながら、それを公器である新聞紙上で表すことができず、ましてや論客の言葉によつて、政府を代弁せざるを得なかつた吉岡文六。国民を欺く行為でしかなく、徳富蘇峰に宛てた書簡から彼の苦悩が浮かび上がる。

その苦悩をさらに深めるものになつたのが、同郷の軍人の来訪だつたのではないだろうか。書簡から約1カ月のちの同年11月20日、吉岡文六は有楽町の毎日新聞本社で海軍少将、高木惣吉の訪問を受ける。高木の日記は、その日の出来事を短い記述で残す。「十一月二十日 天気 曇晴 正午少し前 毎日新聞に吉岡編輯局長訪問 飛鳥地方部長、田中東亜部長及伊藤金次郎同席」。高木は社内の来客用レストランで、昼食の饗応を受け、吉岡ら毎日新聞幹部らと懇談している。

高木惣吉は吉岡文六と同じ熊本・人吉の出身。吉岡より高木が6歳年上だつた。貧しい家庭に生まれた高木は働きながら学び、海軍兵学校へ進む。その後、海軍大学校を首席で卒業した英才だつた。身体が丈夫ではなかつたため、軍艦での勤務はないが、その明晰な分析力から軍政には長けていた。当然ながら、悪化する戦況を十分に把握しており、このころ、早期終戦論に傾いていた。

事実、のちの44年9月から高木は海軍次官、井上成美の密命により病氣と称して終戦工作に従事し、「いまや、望みなき戦争に終止符をうち、戦争の継続による塗炭の苦しみから国民を救う宿願の達成に邁進する」海相、米内光政を補佐する立場から「米内さんの口述を高木さんが筆記した「米内口述覚書」を残した。

遺族が保管していた高木惣吉の多数の日記は、国立国会



飯田 和郎 (いいだ・かずお) 氏

1960年生まれ。関西学院大学経済学部卒業後、1983年毎日新聞社入社。佐賀支局、西部本社報道部を経て91年に東京本社外信部。北京特派員、台北支局長、中国総局長(北京)、外信部長など。2013年RKB毎日放送(本社・福岡市)に移り、報道制作センター長、専務取締役などを務めたのち23年に退職。在職中から福岡市の西南学院大学院国際文化研究科修士課程に通い、本稿を修士論文として提出(『アジア時報』用に改題)、24年3月修了した。一般社団法人アジア調査会理事。

図書館憲政資料室からの求めで、現在は同資料室で非公開保存されているが、そのコピーは縁者が人吉市内で運営する高木惣吉記念館で閲覧することができる。

日記はさらに、毎日新聞社内での懇談の話題として「軍港支局の件」を挙げている。無署名の『高木惣吉日記』<sup>12)</sup>の解説によると、「横浜、広島、長崎、京都でキヤッチするニュースよりも、横須賀、呉、佐世保、舞鶴のニュースが絶対多数である」としている。つまり県庁所在地に置かれた規模の大きな支局より、同じ県内で軍港を持つ小さな支局の方が海軍の動きがつかめ、敗色

濃厚な戦争の実情がわかる。軍港に設置された支局を重視せよという高木の助言だった。

高木惣吉記念館にある高木惣吉の日記や、書籍『高木惣吉日記』の解説では触れられていないが、高木はこの面談で、吉岡らに重大な決意を伝えていた。前出の渋谷敦は戦後、同席者の一人、田中香苗にインタビューし、その様子を自著に記している。

筆者が聞いた田中東亜部長(香苗氏、のち社長)の直話によれば、惣吉がその席で語った時局の談の一語一語は静かであったが、一同を異様な緊張と暗澹とした想いに引き込む迫力があつたという。「戦争はここまで来た。日本の前途には、絶望という名の道だけが横たわっている。勝てない戦いをいつまで続けるつもりか」。(略)惣吉の言葉は、一同の胸に突き刺さる。<sup>13)</sup>

これも、報道機関を対象にした高木惣吉による終戦工作の一環とみてよいだろう。高木は、旧知の同郷・吉岡文六に対し、新聞社幹部としての決断を迫ったのだろう。「勝てない戦いをいつまで続けるつもりか」との高木の言葉を聞き、その問いが胸に突き刺さった一人に吉岡もいた。「竹槍では間に合はない」と訴える記事が『毎日新聞』紙上に載るのは、その3カ月後である。1943年から翌44年に

かけての吉岡の行動を追っていくと、この時期に、新聞人として、軍部批判の記事を載せる決断に至ったのではないだろうか。

毎日新聞社の編集局内で、吉岡文六を支え、一方で竹槍事件を主導した吉岡の身を案じていた一人に、当時、部下の東亜部長だった田中香苗がいる。第1章第2節で述べたように、この出来事の責任を取り、新聞社を離れた吉岡に対し戦後、熱心に復職するよう懇願したのが、田中だった。吉岡と田中は東亜同文書院の同窓。吉岡は第19期、田中は第25期。2人は卒業後、同じ毎日新聞社に進み、同じく中国問題を論じるスペシャリストになった。『無冠の帝王』の筆者、渋谷敦は「二人の交友は血のように濃く、ことに田中は吉岡の人となりをだれよりも深く理解していたようである」と論じている。その田中はこう回顧している。

当時のことを思い浮かべつつ、断固自分の身を挺して問題の文章を執筆した記者を守ったところに吉岡さんの偉さがあった、と思う。(略)この筆者を守り、新聞記事の尊厳を身を捨てて守った編集局長が偉いのだ、と私は今も考えている。ともあれ、この事件で、局長を辞任し、休職となり、その任期満了のため正式辞表を書きに来たのが、翌二十年の二月末。すでに日本は敗戦していた。(略)彼は誰よりも早く敗戦を予期していたが、そ

の敗戦を迎えて悲しかった。<sup>133</sup>

母校の『東亜同文書院大学史』は、「吉岡文六(熊本)は天成の記者で、蛇は寸にしての組だ」と評する。「蛇は寸にして人を呑む(蛇はわずか一寸ほどのものだが、人を呑もうとする気魄がある)」。最大級の人物評であり、竹槍事件こそ、軍部が盲進したあの時代、蛇(一ジャーナリスト)が人(東條英機)を呑み込もうと挑んだのではないだろうか。ペンで時代に挑んだ男は、その後の日本の行く末も予見していた。

毎日新聞社を去った吉岡文六は、ほどなくして他界した。一方、東亜同文書院、毎日新聞社、中国特派員と、吉岡の背中を追いかけるように歩んだ田中香苗は戦後、「中国」をキーワードにしたさまざまな場面で活動する。竹槍事件が起きた時、田中は東亜部長。前任者は吉岡だった。

田中は竹槍事件の記事掲載前後の吉岡の動きや判断を、ごく間近で見ていた。戦後その時々において、田中が下したいくつかの決断の根拠は、竹槍事件当時の先輩・吉岡の判断に酷似している。東亜同文書院で学んだジャーナリストの系譜は受け継がれていく。それらは第2章以降、詳説していきたい。

田中香苗は第2節で紹介したように、吉岡文六の思い出を綴っている。それには1947年3月1日、一周忌に合

わせ、吉岡が眠る熊本・人吉の東林寺を訪れる場面がある。田中は吉岡の妻・千賀が暮らす境内の離れにあった仏壇で焼香を済ませると、そばの壁に「吉岡さんの達筆の字が見事に表装されて掛けてあった」ことに気付く。そこには奇妙な一文が書かれていた。

春のように聴すのです、黙殺、笑殺、憫殺などは致しません、エハラエハラテヘーツテヘーツツ人生それでよいのです、石頭矢人

「矢人」は吉岡の雅号である。「聴（ゆる）す」は、日常的に使用する機会が多い「許す」と同義語だが、より「受容する」「受け入れる」の意味合いが濃い。吉岡は、書で何を訴えたのだろうか。こうは読めないだろうか——すべてが改まる春のように、それを節目に、起きたことに身を委ねればよいのだ。黙殺、笑殺（一笑に付してかえりみないこと。笑って相手にしないこと）、憫殺（とるにたりないというあわれみを込めて黙殺すること）。そんなことはもう、どれも shouldn't。ただ、エハラエハラとしまりなく笑う。人生はそれでいいのだ。

戦時下にあり、報道機関の編集責任者として、戦況悪化という事態を知りながら「黙殺、笑殺、憫殺」してしまっ

た自分への悔悟がにじむ。だから、自らに嘘をつくことを止め、新名丈夫に命じてあの竹槍事件の記事を書かせたのだ。もう「黙殺、笑殺、憫殺」はしない。責任を取り、自身は身を退いた。それも運命ではないか。それは恥じてはいない。ありのままに受け入れればよいではないか——。吉岡文六の生涯、とりわけ竹槍事件の記事に至る決断を追っていくと、論者にはそう読める。

離れに掛けられていた吉岡文六の筆による表装は、1965年7月の豪雨被害による離れの倒壊とともに、行方は知れぬままだ。

82 (無署名)「検証・戦争責任『言論』忘れ宣伝機関に 戦況伝えず国民鼓舞」(読売新聞)朝刊東京本社版、2006年3月3日朝刊)14頁。

83 同前、14頁。

84 渋谷敦「無冠の帝王——ある新聞人の生涯」(清風出版、1968年1月)27、28頁。

85 1937年7月7日夜、北京郊外の盧溝橋付近で、夜間演習中の日本軍と中国軍の間で起った衝突。これを機に日中全面戦争、太平洋戦争へと進んだ。中国では「七七事変」とも呼ぶ。

86 1887-1975年。中国の政治家。中華民国総統。孫文に師事し、革命軍を養成して北伐を成功させた。のち、国民政府主席となり、反共政策を推進。抗日戦争では国共合作により共産党と協力したが、第

- 87 二次大戦後、国共内戦に敗れ、1949年台湾に退いた。  
1921-2000年、愛知県生まれ。エッセイストほか、放送タレント、俳優としても活動した。
- 88 三國一朗・井田麟太郎編「懲罰召集」「竹槍事件」『昭和史探訪4 太平洋戦争後期』（角川書店。1986年12月）84頁。
- 89 前掲、三國一朗・井田麟太郎編「懲罰召集」「竹槍事件」『昭和史探訪4 太平洋戦争後期』160頁。
- 90 同前、161頁。
- 91 前掲、渋谷敦『無冠の帝王——ある新聞人の生涯』、163頁。
- 92 『支那人』（東京日日新聞、大阪毎日新聞、1939年9月）。
- 93 前掲、吉岡文六「政治外交の性格」（『支那人』）102頁。
- 94 （無署名）「序」（前掲、『支那人』）2頁。
- 95 同前、2頁。
- 96 吉岡文六「対支外交の先決問題」（『外交時報』、外交時報社、第720号、1935年3月）79頁。
- 97 同前、79頁。
- 98 「支那座談会」（『東洋』、東洋協会、1935年7月 第439号）44頁。  
吉岡を除く座談会出席者14人の氏名・当時の肩書は以下のとおり。井上謙吉（前支那陸軍大学総教習）、本田忠雄（軍令部第六課長）、大西齊（東京朝日新聞）、高木陸郎（中日実業会社副総裁）、山本健治（台湾銀行理事）、酒井忠道（三井物産会社参事）、喜多誠一（参謀本部支那課長）、守島伍郎（外務省東亜局第一課長）、水野鍊太郎（本会会長）、永田秀次郎（同副会長）、大蔵公望（同理事）、村田俊彦（同）、松岡均
- 100 平（同）、佐藤安之助（同）。前掲、『東洋』41頁掲載の出席者一覧より。1897/1901-2003年。太平洋戦争勃発後、流暢な英語を生かして蒋介石と外国の首脳らとの交渉・往來の通訳、また交渉代理人となり、夫を支えた。実業家の父、宋嘉樹は孫文の有力な後援者でもあった。近代中国史において、2人の姉・宋靄齡、宋慶齡と運命を分かち、「宋家の三姉妹」としても知られる。なお、誕生年は説により2つある。
- 101 上海を拠点とした浙江省、江蘇省出身の資本家集団の総称。蒋介石率いる南京・国民政府の経済的支柱でもあった。
- 102 吉岡文六「必然の日支抗争」（『東洋』、東洋協会、第465号、1940年9月）23頁。
- 103 同前、26頁。
- 104 国民党幹部で西安にいた張学良らが、共産党軍との内戦を進めるよう南京から来た蒋介石を監禁した事件。張は内戦の停止、一致抗日などを要求、共産党の周恩来の調停により蔣は要求を原則的に認め、釈放された。国共内戦を停止させ、抗日民族統一戦線結成のきっかけとなった。
- 105 「はしがき」（前掲、『木曜倶楽部講演集 第二輯』、木曜倶楽部、1937年4月）。
- 106 吉岡文六「支那はどうか」（同前、『木曜倶楽部講演集 第二輯』、木曜倶楽部）47頁。
- 107 同前、48頁。
- 108 同前、53頁。
- 109 前掲、吉岡文六「政治外交の性格」（『支那人』）84〜85頁。

- 110 同前、88頁。
- 111 1840年から1842年にかけて、清国のアヘン輸入禁止によって英国と清国との間に起こった戦争。清国は敗北して南京条約を結び、香港を割譲したほか、広東・上海など5つの港を開港した。
- 112 吉岡文六「外務省外交の復活を望む」(『国際知識』第18巻8号、1938年8月) 2頁。
- 113 同前、2頁。
- 114 1863-1957年、熊本県生まれ。本名・猪一郎。同志社中退後、自由民権運動に参加。のち民友社を設立、「国民之友」「国民新聞」を発刊し、自由平等、平民主義の論陣を張り、近代日本の代表的時論家として活躍。日清戦争以降は国粹主義に傾き、第二次世界大戦中には、大日本言論報国会会長を務めた。
- 115 吉岡文六が徳富蘇峰へ宛てた書簡から。徳富蘇峰記念館所蔵。
- 116 1874-1948年、和歌山県生まれ。外交官で太平洋戦争時の中華民国大使、東條内閣の外交顧問などを務めた。戦後はA級戦犯として逮捕された。
- 117 2023年7月25日、論者が宮崎松代に行った電話での聴き取りによる。
- 118 徳富蘇峰、本多熊太郎「決戦と一億の覚悟 徳富本多両翁対談」(『毎日新聞』、1943年10月19-22日朝刊) 1面。
- 119 前掲、徳富蘇峰、本多熊太郎「決戦と一億の覚悟 徳富本多両翁対談」(『毎日新聞』、1943年10月19日朝刊) 1面。
- 120 同前、1面。
- 121 前掲、徳富蘇峰、本多熊太郎「決戦と一億の覚悟 徳富本多両翁対談」(『毎日新聞』、1943年10月22日朝刊) 1面。
- 122 情報局の指導・監督のもとに、1942年12月に組織された思想家・評論家の国策協力団体。会員は43年7月現在で917名。幹部には天皇制国家主義の支持者が多く、日本文学報国会、日本美術報国会、日本音楽文化協会など他の国策協力団体と並んで総力戦体制の一翼を担った。45年8月27日に解散した。
- 123 (無署名)「転向思想史上のらびと——略伝」『共同研究 転向6 戦後篇・下』(思想の科学研究会編、平凡社、2013年3月) 301頁。
- 124 1893-1979年、熊本県生まれ。大正・昭和の軍人。戦後は東久邇宮内閣で海外からの邦人帰還に従事した。自身の見聞・活動を記録した著書として『高木惣吉日記』(山本五十六と米内光政)『太平洋海戦史』などがある。
- 125 高木惣吉の日記の複写は、熊本県人吉市矢黒町1970-5の高木惣吉記念館が所蔵。
- 126 実松讓「米内光政小伝」(『海軍大将米内光政覚書』、高木惣吉写・実松讓編、光人社、1978年11月) 228頁。
- 127 1880-1948年。岩手県生まれ。海軍の要職を歴任ののち、1940(昭和15)年に首相就任。日独伊三国同盟を望む陸軍と対立して総辞職。その後、海相として太平洋戦争終結と海軍の解体に当たった。
- 128 実松讓「編者のことば」(前掲、『海軍大将米内光政覚書』) 1頁。
- 129 高木惣吉『高木惣吉日記 日独伊三国同盟と東條内閣打倒』(『毎日新聞



- 社、1985年3月)
- 130 同前、147頁。
- 131 渋谷敦『積乱雲』（熊本日日新聞社、2000年11月）195頁。
- 132 前掲、渋谷敦『無冠の帝王——ある新聞人の生涯』153頁
- 133 田中香苗「心に灯を点じた書院の人々」（『江南春秋 東亜同文書院第24、25期生記念誌』、記念誌出版世話人編、1980年3月）343頁。
- 134 東亜同文書院大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史——創立八十周年記念誌——』（滬友会、1982年5月）126頁。
- 135 田中香苗「吉岡文六さん」（『回顧 田中香苗』）151頁。
- 136 同前、154頁。
- 137 『日本語大辞典』（小学館、オンライン版）
- 138 同前。